

やんばるの森に住み、この森で独自の進化をしてきたノグチゲラは
やんばるの宝です
ノグチゲラがこれからも安心して暮らしていけるような森で
あり続けるために…



私たちにできること

- ①ゴミの管理はきちんとしましょう。カラスが増えすぎてしまいます。
- ②ペットは最後まで責任を持って飼いましょう。すてられたペットもそのペットたちに食べられてしまう生きものたちもかわいそうです。
- ③ノグチゲラを観察するときは近づかず、そ〜っとしてあげましょう。巣に近寄ると子育てを放棄してしまうことがあります。



環境省やんばる野生生物保護センターからご協力をお願い

足環のついているノグチゲラを見かけたら観察記録をお知らせください。

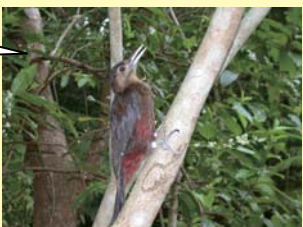
【記録内容】

- ①氏名・連絡先
- ②観察日時（例：2010年12月24日午後1時30分）
- ③観察場所（例：国頭村奥間、与那覇岳入り口から約～m）
- ④見た鳥の足環の色（例：左上橙、左下白、右上橙、右下金属）

足環の色がはっきり分からなかった場合には、分かった範囲でお知らせください。

想像や見当をつけないようにお願いします。（例：左上白にみえた・左下青っぽい・右上不明・右下金属）

森の中のノグチゲラは
こんな風に見えます。



連絡先：環境省 やんばる野生生物保護センター 沖縄県国頭郡国頭村比地 263-1 TEL 0980-50-1025 FAX 0980-50-1026

制作：環境省 やんばる野生生物保護センター、ノグチゲラ保護増殖事業ワーキンググループ
監修：小高信彦（森林総合研究所九州支所）
協力：渡久地豊、財団法人山階鳥類研究所、NPO 法人どうぶつたちの病院、松岡茂
発行：2007年発行、2010年改訂、2018年改訂

ノグチゲラ

～やんばるの森に暮らすキツツキ～



学名：Sapheopipo noguchii
英名：Okinawa Woodpecker
全長：約30cm

国指定特別天然記念物（文化財保護法）

国内希少野生動植物種（絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律）

絶滅危惧種（環境省、国際自然保護連合のレッドリスト）

沖縄県の県鳥、東村の村鳥

体は全体的に褐色だが、日の光を浴びると下腹部の赤い羽毛が鮮やかで美しい。
やんばるでは昔から「キータタチャー」、「キーチチチャー」と呼ばれている。

写真の個体：♀mBWP178

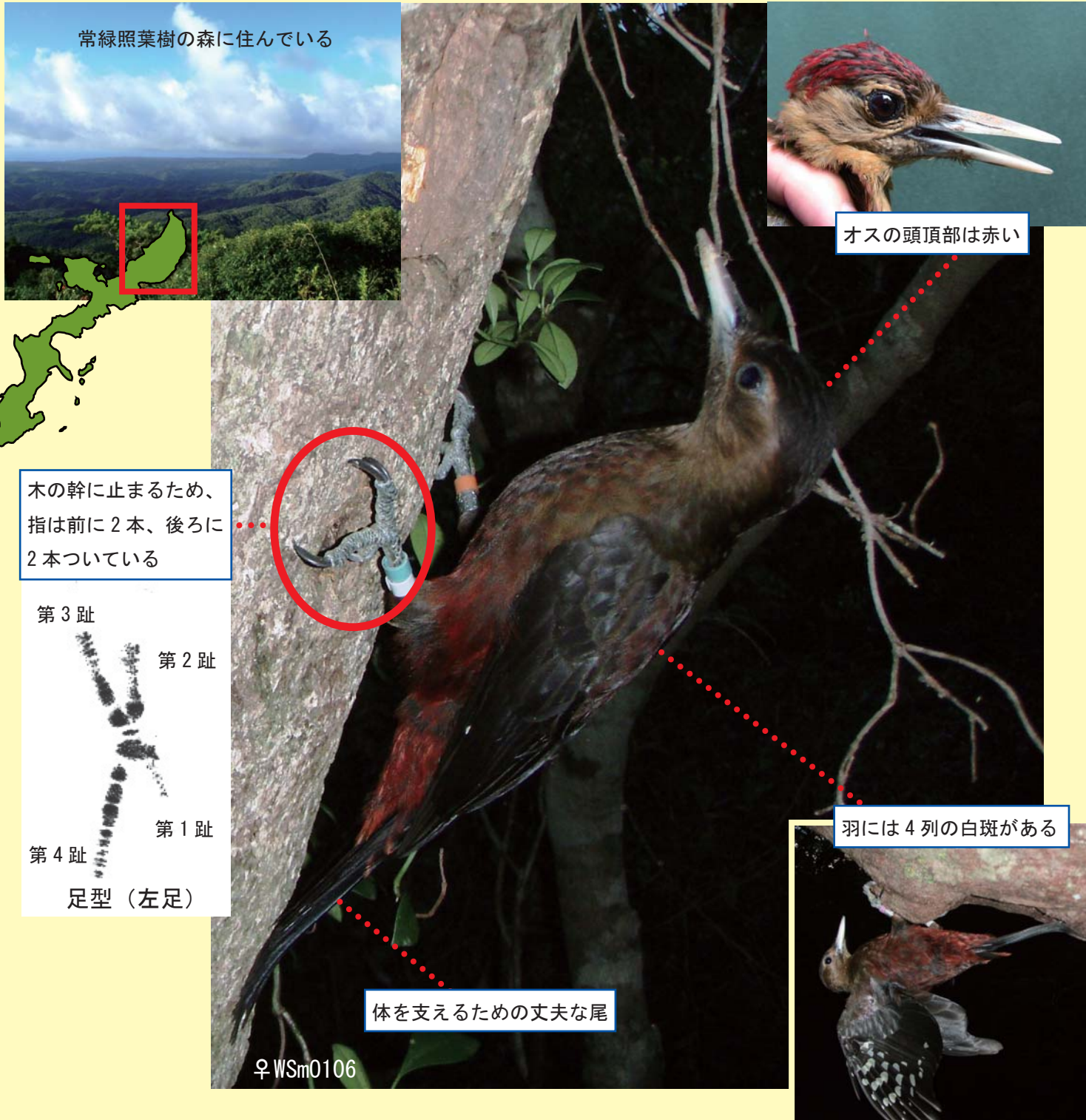


ノグチゲラってどんな鳥？

ノグチゲラは沖縄県北部のやんばると呼ばれている地域だけに生息するキツツキです。

1887年に新種として発表され、世界中の人に知られるようになりました。名前はノグチゲラの発見に関わったと考えられるノグチさんに由来し、学名の *Sapheopipo noguchii* には「ノグチさんの独特なキツツキ」という意味があります。

個体数は以前は100羽程度とされていましたが、1990年代の詳細な調査結果では、400羽程度と推定されました。



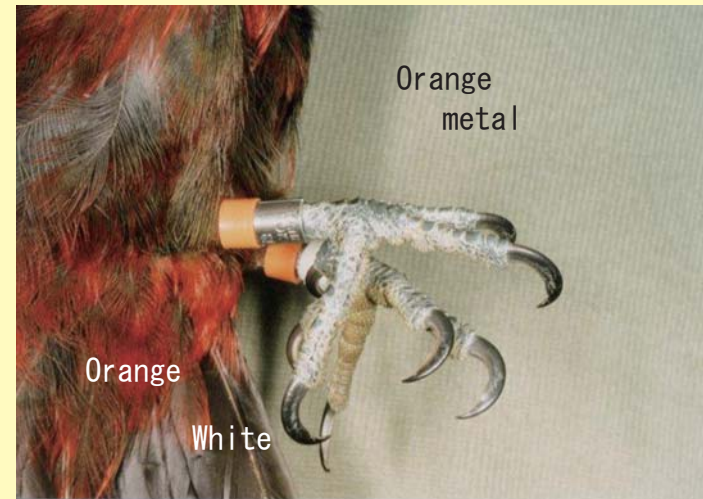
ノグチゲラの調査

ノグチゲラの生態を調べるため、環境省では「ノグチゲラ保護増殖事業計画」に基づき、1999年3月から足環を装着して個体を識別し、それらの追跡調査などを行っています。

この調査を行うことで、寿命や繁殖行動、社会構造などの基礎的な情報が集まり、ノグチゲラの保全を考える時の資料となります。

◆足環の装着・計測◆

捕獲後、足環を装着します。この足環の色の組み合わせにより、個体識別ができるようになります。また、個体の情報を知るために足環装着後に計測を行います。



足環にはプラスチックのカラーリングと金属(メタル)リングを使います。足環は①左足上、②左足下、③右足上、④右足下の順に英語の頭文字で表します。左写真の個体はOWOmと表します。

◆追跡調査◆

足環をつけた個体を追跡し、行動や繁殖状況を観察します。山の中をくまなく歩いてノグチゲラを見つけ、確認した個体の足環の色、見つけた場所、時間、行動の様子などを記録します。鳴き声やドラミングなど、音をたよりにノグチゲラを見つけることもあります。

※ドラミング

キツツキの仲間が縄張りを主張したり、つがい相手を呼び寄せるために木をたたいて音を出すこと。



左の写真は1999年に初めて捕獲されたオス個体で、この時に装着された橙色の足環から「ダイ」と呼んでいます。

ダイは追跡調査から、1999年から2008年まで10年連続で繁殖していることが確認でき、2010年も繁殖が確認できました。

これから、ダイやその他の個体を観察してわかってきたことを紹介します。



これまでにわかってきたこと

つがい形成

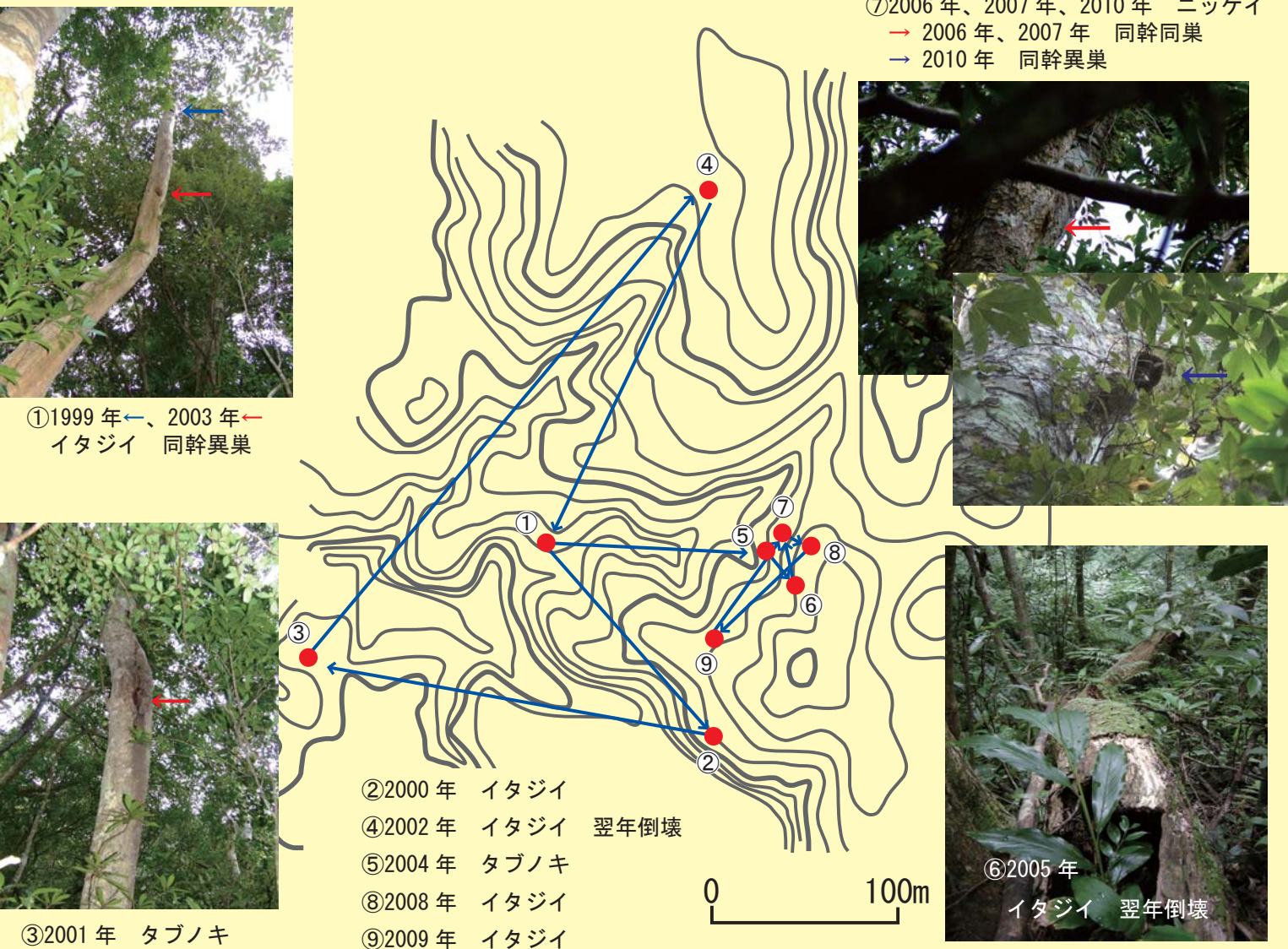
これまでの観察では、ノグチゲラはつがいの相手がいなくなる限り、すべて同じペアで繁殖していました。



※ダイは1999年、2000年とキー子というメスと繁殖しました。2001年からキー子が見られなくなり、代わりにシセイというメスとペアになりました。2001年から2008年までこのペアは繁殖に成功しました。残念ながら2009年は繁殖を失敗したためペアの確認もできませんでしたが、2010年には再び繁殖し、1羽のヒナが巣立ちました。

巣の位置の変遷

定住性が強く、他の同じくらいのサイズのキツツキに比べ狭い範囲で行動します。12年間で、ダイの巣はわずか約4haという狭い範囲に作られていることがわかりました。



巣穴掘り

春、ノグチゲラは繁殖のために巣穴を掘ります。巣穴掘りはオスとメスが共同で行います。巣に使われる木はイタジイが多く、そのほかにニッケイやタブノキ、イスノキなども使われます。巣穴は高さ3〜6mのところ掘られることが多く、巣穴の入り口の直径は約7cm、巣の深さは30〜40cm程度です。胸高直径30cm以上の木が多く使われます。このような木は林齢40年以上の森に多くあります。また、最近では人里近くの森で、センダンやリュウキュウマツに営巣するノグチゲラも見られます。

巣穴掘りには数週間〜1ヶ月の時間を要しますが、長いものでは12月頃からコツコツと掘り進めて春に巣穴が完成したものもあります。



倒壊したイタジイの巣穴を測ってみたところ直径は7cmでした。



イタジイ



タブノキ



センダン

産卵とヒナの誕生

巣穴が完成すると次は産卵です。日中はオスとメスが交代で卵を温めますが、夜はオスが温めます。産卵から2週間ほどでヒナがかえります。



産卵数は4個程度



巣穴のヒナ

卵からかえったばかりのヒナはまだ羽毛が生えそろうていないので、体温調節がうまくできません。このため、日中はオスとメスが交代でヒナの温めとエサやりを行います。夜間はオスが巣に残り、ヒナを温めます。



ヒナの頭頂部はオスもメスも赤いです。

巣穴から顔を出すヒナ

巣立ち

ヒナは卵からかえって4週間ほどで巣立ちます。巣立つヒナは2羽ほどと少ないです。ヒナは巣立ちをした後もしばらくは親と一緒に過ごします。独立するのは秋頃です。

エサの違い

ノグチゲラは木の実、昆虫、クモなどいろいろなエサをヒナに運んでいます。ノグチゲラのオスは頻りに地上でエサを採り、土の中にあるクモやセミの幼虫を、メスは木の幹でエサを採ることが多く、木の中に住むカミキリムシの幼虫を多く運んできます。

オスとメスが違う位置でエサをとることで、狭い範囲でより多くのエサを採ることができます。



オオムカデを運ぶノグチゲラのオス親



カミキリムシの幼虫を運ぶノグチゲラのメス親







地上でエサを探すノグチゲラのオス 地上で採餌するオス成鳥（右）と幼鳥（左）



土の中からエサを掘り出すため、オスのくちばしには土がついていることがあります。

ノグチゲラのエサ その1

～キムラグモ～
地面に穴を掘ってその中に住みます。穴の入り口にはふたがあり、コケなどでカムフラージュされているのでなかなか巣を見つけることができません。

コケでカムフラージュしている巣

ノグチゲラがクモを採ったあと

ノグチゲラはこの巣を見つけ、器用にクモを取り出して捕食します。

ノグチゲラのエサ その2

～ドングリ～
シイの実などを枯れ木のくぼみや地面、木の根元にあてがい、実を押しえつけてからを割って食べます。




イタジイの実



やんばるの森で独自の進化をとげたノグチゲラ

これまで、ノグチゲラはその色や形態から1属1種とされてきました。しかし、DNAを調べたところノグチゲラはアカゲラ（日本では北海道・本州とその周辺の離島に分布）やオオアカゲラ（日本では北海道から奄美大島まで分布）と同じアカゲラ属（*Dendrocopos*）に近い種であることが示唆されました。頻りに地上で採餌することや土掘りをして餌をとることは、アカゲラの仲間ではノグチゲラにしかみられない行動です。また、ノグチゲラの羽色は林床の色と非常によく似ており、この羽色は空からの捕食者であるツミやハシブトガラスに対する保護色になります。

やんばるにはもともと肉食の哺乳類はいなかったため、安心して地上で採餌できる環境がありました。土掘りすることやこの羽色はやんばるの豊かで独特な自然環境の中で独自に進化していったものだと考えられます。



林床に紛れ込むノグチゲラ

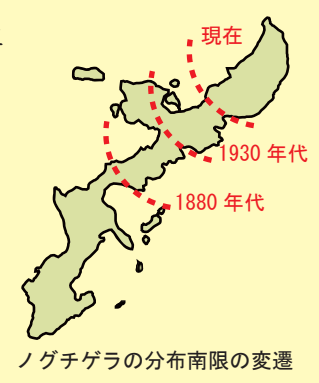


オオアカゲラ
撮影：松岡茂



生息地の減少

ノグチゲラは1880年頃までは恩納岳あたりまで分布していたと言われ、1930年頃には名護岳付近でも頻りに観察されていました。しかし、現在継続して確認されているのは、塩屋湾から東村平良を結ぶラインの北側のみです。



ノグチゲラの分布南限の変遷



伐採跡地

ダムや林道、農地の開発、木材の生産などによる森林伐採のため、生息環境が縮小、分断化され分布域が後退していきました。



新たな問題

ノグチゲラが住むやんばるの森にもフィリマンダースや、すてられて野生化したネコ（ノネコ）などの外来種がいます。そのマンダースやノネコがノグチゲラを襲っていることがわかりました。また、沖縄で増加しているハシブトガラスがノグチゲラの巣やヒナを襲う様子が頻りに観察されるようになりました。



マンダースの胃の中から見つかった



マンダース

ノグチゲラの羽



ノグチゲラの巣穴をのぞき込むハシブトガラス